

民俗博物館だより

Vol. VIII No. 2

1981. 9. 15



地藏まつり (川西町結崎)

目 次

特別テーマ展開催によせて (特別テーマ展特集)	1
絵馬発生・出現にみる史資料の再整理と課題 (特別テーマ展特集)	3
大和の盆踊り (大和の民俗行事 ②4)	5
旧岩本家住宅について (大和の民家 ⑫)	7
野神まつりの絵馬 (民俗資料調査抄報 ⑫)	10
藍染め (民俗資料調査抄報 ⑬)	10
お知らせ・他	11

特別テーマ展開催によせて

奥田 猛

今秋の特別テーマ展は、「日本人の祈り—小絵馬」という展示テーマで企画し、大和の各地に遺る小絵馬祈願とその信仰を中心に、併せて各地に現存する小絵馬祈願と信仰を通じて、絵馬のもつ本来の意味を探ってみようと意図するものである。

たとえば、近年においては、京都に居住している関係から京都各地の社寺に奉納されています絵馬をみると、受験による大学や高校などへの合格祈願が、とみに多いように思える。北野天満宮には、数多くの合格祈願の絵馬が掛けられていて、本来の学業上達を祈り、その成就を願ったという時代や世相から少しずつ離れていくようにも伺える。また、県下の例をみると安倍の文殊院や三輪^{おおみわ}の大神神社（久延彦神社）、そして先般関西博物館連盟の会議に出席した際に信貴山（朝護孫子寺）にも多くの合格祈願の絵馬が掛けられているのをみたが、何かしら現代の世相を反映しているようにも思えた。

一方、生駒の聖天さん（宝山寺）には「心

に錠を、という意味の絵馬が数多く掛けられていて、そこには「禁酒」「禁煙」「禁博」そして「禁女」などの文字が、奉納（祈願）者の手で書かれているということである。

これらの祈願絵馬をみるかぎり、現代社会の一種のヒズミを表現し、私たちに何かを警告しているようにも思われる。単に、祈願絵馬が、奉納する人たちの「本心」をさらけだして神や仏に願い事を成就させるためだけでなく、大きな視野でその一群の祈願内容を見ると、その時代の社会状況が理解できるのではないだろうか考える。

このように奉納（祈願）する人たちの心の底にある神（神社）や仏（寺院）に対する祈りが、これらの絵馬を媒体にし願いを込め、乞い願い奉納（祈願）する絵馬として、所謂庶民とか、民衆とかの世界に表われたところに民俗文化の一端をみることができるように思える。

今回の展示では、このような考えの意図で、絵馬の変遷、つまり古代の絵馬がどのような



▲ 奈良・安倍の文殊院の合格祈願絵馬



▲ 奈良・久延彦神社の合格祈願絵馬



▲ 奈良・久延彦神社の合格祈願絵馬



▲ 奈良・日笠天満宮の諸願絵馬



▲ 大阪・四天王寺の石神堂の病氣平癒祈願絵馬



▲ 京都・北野神社の絵馬堂

形態であり、いかなる信仰に支えられていたものかということや、中世から近世にかけて今日みられるように多種多様の祈願内容が盛り込まれる形態に移り変わってきたのはどのような要因によるものであるのか、そして近世から近代に至って絵馬祈願が次第に特定の祈願内容のものに限定されてきたのはなぜか、という点を含めて歴史的に絵馬の歩みを捉えていくことを目的の一つとしている。もう一つの目的は、前述したとおり、多種多様の祈願内容が現われ、これに伴ない絵馬の絵柄が豊富なものとなってきたその原因を究明するために、関連資料を展示して、観覧者にこの点を考えていただくそするものである。

したがって、展示では、奈良時代後半の出土絵馬（稗田遺跡）、土馬（稗田遺跡・他）鎌倉時代から室町時代にかけての寺院発見絵馬（秋篠寺、元興寺、当麻寺）、室町時代後半の神社発見の絵馬（春日大社）、そして江戸時代の絵馬（天理参考館蔵）を時代的に配置していき、いつ頃から「馬」を主な絵柄としたのか、絵馬から数多くの祈願内容、絵柄へと移り変わるかを理解していただき、その信仰の姿をみていただければと思っている。

このように今回の特別テーマ展の小絵馬の展示では、絵馬をとおして、単に絵柄のおもしろみだけで満足するのではなく、現存する絵馬祈願とその信仰が、今日まで受け継がれているという現実を、展示の個々の資料を「点」として捉えながら、これらの「点」を「線」として結びつけていただき、奉納する人たち—立場をかえて、私たちもその一人一人の範疇に入るかもしれないということを念頭におきながら—が、切実な願を神や仏に絵馬を通じて、訴えかける無言の表現を行なう姿を、展観される人たちに理解して貰えば、この特別テーマ展を開催した意図は十分に果し得る、と私は確信する次第である。

（当館館長）

絵馬発生・出現にみる史資料の再整理と課題

奥野義雄

絵馬祈願は時代時代によって、その社会・世相を反映しているといっても大過ないであろう。現代の祈願絵馬が、私たちに語りかける世相には〈受験地獄〉の一端を示しているといえる。大学、高校そして中学受験の合格の願望が切実に奉納されている絵馬によって語られている。神社仏閣に奉納された絵馬の大半が受験合格祈願であり、かつて祈願されていた育児祈願（子供の夜泣きや^{かんむし}疳虫、そして入浴嫌い・散髪嫌い^{さかやき}〈月代〉など）、病氣^{へい}平癒祈願（皮膚病や痔病、そして眼病など）、さらに旅行安全祈願などが少なくなったのに反比例しているようである。

本来学業上達・達成に祈りを込めて神や仏に切なる願いを求めた絵馬祈願が、受験のための合格へと^{いろど}彩られていることは確かである。そこには、受験生をもつ親たちの、あるいは彼ら自身の切実な願いと本心＝本音の世界が現代社会・世相に裏打ちされていたからにほかならない。

また、絵馬が本来いかなる祈願奉納すべきものであったか、という内容については、祈願者自身知るすべもなく、そして本来的な絵馬祈願がいかにあったかということよりも、いかに成就し得るかという即時的効用が重大なものであったといえよう。

では、祈願絵馬の発生はいつ頃であり、その出現した要件はどのようなものであったかを垣間見ながら、課題を提示することにしよう。

ただその前に今回の特別テーマ展では、絵馬が出現する起因と絵馬の変遷を理解し得るとともに、多種多様の祈願内容やそれに関する絵柄を生みだした要因に関連資料を展示することによって、民衆や庶民と呼ばれてきた人たちの絵馬を媒介にした信仰の一端を認識して貰う意図を含んでいるので、ここでは祈願絵馬の発生・出現にみる所謂絵馬の起源とでもいうべき点を考え、その課題についてその大略を述べるにとどめたい。

※

※

一般に絵馬の出現は、現在までの史資料から奈良時代後期に遡るとされている。このことは、すでに周知の静岡県浜松市伊場遺跡出土の檜製の墨書きの方形絵馬によって、従来平安時代に絵馬発生の源流を求めてきたことを再考させるにいたったのである。同遺跡の平安時代初期の地層と考えられている地点からは馬図らしい板片（2枚）や、その地層の前後からは須恵質製陶馬や土師質製土馬、木製馬形なども出土しており、「馬」を主としたあるいは媒体としての信仰が存在していたとみられている。このことと併せて、すでに認められている『延喜式』において制度化された神馬献上奉幣儀式と『続日本紀』の神護景雲三（769）年三月乙卯の条にみえる。

奉神服於天下諸社。以炊頭從五位下掃守王。



▲ 飛魚の絵馬（京都・今熊野剣神社）



▲ 心に錠〔錠物〕の絵馬（奈良・生駒宝山寺）

(中略) 其太神宮及月次社者。加之以馬形并鞍。という記述の「馬形」とを関連づけることによって、神馬献上から馬形へと変質し、馬形から絵馬へと移り変っていったというのが、今日定着しつつある絵馬発生・出現の考え方である。そして、この馬形には『肥前国風土記』の佐嘉郡の項にみる「人形・馬形」を作^さって佐嘉川上流の荒ぶる神を鎮めたという記述や、『北山抄』の天曆三(949)年七月二十二日の条の月次祭^{つきなみさい}の記述すなわち馬の足腰がたたなくなったために板立御馬を献上したという内容から、土馬や板立馬があったこともよく知られている。このことから土馬や板立馬などは、生馬献上の代用とされたもの(馬形)であると考えられてきたのである。そして、馬形から絵馬へと変っていったと考えるには充分だと推定し得る史料として、平安時代中頃の『本朝文粹』^{ほんちようもんすい}巻13にみる「色紙絵馬三疋走馬十列」という記述が挙げられ、北野天神に奉納する御幣・神宝・神馬の内、神馬が「色紙絵馬」に変わったというのである。このことについては、少し時代が下るが、『不動利益縁起』に描かれた智興の病氣平癒祈願場面の紙絵馬の存在によって裏づけされているようである。

しかしながら、この絵馬が生馬(神馬)献上の代用品として発生・出現したという従来の考え方を再考すると、なぜゆえに祈願絵馬がこの意図から形成される必然性をもったのかという疑問が生まれる。いいかえると生馬献上の代用品として絵馬が発生すると考えるなら、後世にみる「祈願」を主たる目的とする「絵馬」の出現は、いかなる要因に求める

べきかということになる。

このことについては、諸史料・資料を再整理しないまま私見を述べるのは推察の境以前のことになるが、「絵馬」を媒体にした2つの効用が古代にすでに形成されていたとみるべきではなかろうか。

まず一つとしては、前述の伊場遺跡出土の祭祀用と考えられている絵馬や土馬(平城宮跡や難波宮跡からも検出)、『類聚符宣抄』の天曆二(948)年五月の条にみる丹生川上社と貴布禰社での雨乞祈願(祈雨)、そして前述の『山王靈驗記』や『不動利益縁起』にみる病氣平癒祈願における板絵馬や紙絵馬、そして土馬などは「祈願」を主たる目的・効用としたものであったと考えられる。

その二としては、すでに絵馬発生・出現が神社への生馬献上を代用したものと捉えてきた従来の推察によるものであったと考えられる。

このように「絵馬」発生・出現には、2つの道が古代(奈良時代)から存在していたことによって、一方では祈願形態のものとして、他方では生馬献上形態とでも呼ぶべきものとして個別に展開し、「絵馬」が祈願を主たる意図のもとでより一層進展していったとみるべきであろう。

そこにこそ「祈願」の絵馬の存在が今日まで受け継がれる所以ある、と考えているが、先学諸氏の絵馬研究にみる史資料の整理と検討によって絵馬発生・出現がなにによったかが明確になるのではないかといえる。

※ ※ ※

このように絵馬発生・出現の問題とともに「馬」を主たる絵柄として祈願されてきた絵馬が、今日みられるような多種多様な内容・絵柄を創出した要因についても明確な解答を得ていないのである。この点については後日に譲り、今回の展示の観覧者の視点で考えていただければと思っている。絵馬と関連する資料として展示する板絵や扁額などから、この問題の糸口を見出していれば、と考えている。

(1981・8・15了)



▲乳授かり・乳預けの絵馬(大阪・四天王寺布袋堂)

大和の盆踊り

浦西 勉

盆の行事として8月13日から15日にかけて、オショライサン（ご先祖さん）を迎えて祀り、それを送り出すところから、各地にて寺や宮の広場を使って盆踊りが行なわれる。広場に櫓を建て、そこに太鼓を取りつけ、櫓には太鼓を打つ人と、音頭取りとが登ってその周囲では村人が輪になり踊るという風景を各地で見ることができる。音頭取りが少なくなった今日では、レコードで音頭をとりながら踊り、今もなお盛んに村々で行なわれている。しかし音頭取りが少なくなったため、各地方の特色ある踊りや、歌なども消えてゆくのは淋しい気がする。

かつて奈良県下に盆踊りの歌が、何種類程度あったのであろうか。大正年間^(註1)の記録の何例かを紹介することにしよう。今の奈良市内に当る地域の盆踊りは、次の通りである。

奈良市・江州音頭・河内音頭・奈良音頭
 辰市村・タンダ踊り・住吉踊り・サイモン
 踊り・川崎踊り・コマンダイ踊り
 大安寺村・土山踊り・住吉踊り・サイモン
 踊り・円座踊り・トノサ踊り
 五ヶ谷村・川崎踊り・サイモン踊り・住吉
 踊り・ダンダ踊り
 田原村・サイモン踊り・吉田踊り・長谷
 踊り・反田踊り・万歳踊り
 東里村・吉田踊り・トノサ踊り・サイモ
 ン踊り・土山踊り・ヤットコセ
 踊り・五万歳踊り

などがあげられている。

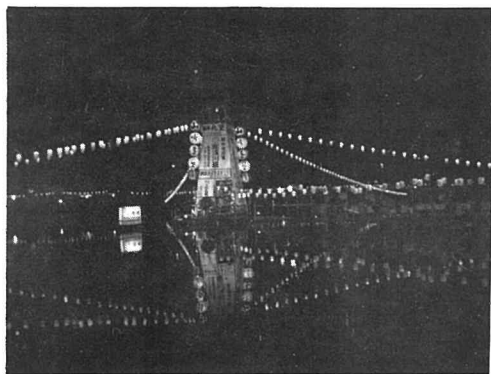
また東山中や宇陀郡地方などでは、祭文踊り・吉田踊り・住吉踊り・土山踊り・トノサ踊り・初瀬踊り、などがある。

また吉野郡地方では下市町などの祭文踊り（鈴木主水）、ヤットコ踊りなどや、十津川村の踊りなどがある。

まだまだ県下各地の盆踊りには種類が他にも沢山あろうと思うが、以上のように様々な踊りがあったことが十分知り得ると思う。これらの踊りは、その土地の声の良い人が音頭取りとなり唄って、それに合わせて、踊り手が踊ったのであった。同じ踊りであっても村々によって少しずつ違っていたという。

奈良県下の盆踊りを見てゆくと、祭文踊りと呼ばれる踊りが多いことに気付く。ほぼ全域にわたって祭文踊りは踊られたのではないかと想像する。ところで、これらの盆踊りは何時頃から行なわれたのであろうか不明な点が多いが推測をまじえて、県下全域に行なわれている祭文踊りについて少し見てゆこうと思うのである。

祭文という言葉は古くから使われており、本来の意味は、神道の神を祭る詞から出ているそうである。それが芸能化してゆき、その詞が、一方では物語化し、もう一方では歌謡化していった。後者の歌謡化したものを歌祭文といわれ、くどきなどを生じ江州音頭なども発生したという。またこの歌祭文は、特に山伏の手にわたって、錫杖や法螺貝、のちには三味線を伴奏楽器として用いるようになり、



▲ 奈良市・猿沢池の盆踊り



▲ 奈良市・学園前団地の盆踊り

内容も元禄期に至って事件などを歌いこむようになったという。(藝能辞典) 歌祭文の中に鈴木主水・白石くどき・お夏清十郎・賽の河原、などが流行した。下北山村では、鈴木主水・白糸くどきや白石くどき、清三くどきなど最近まで唄われていた。

このような祭文が、奈良県下の各地方の盆踊りの歌としていつごろから使われ始めたのか不明な点である。しかし次にあげる例などから見て江戸時代後半になってからだろうと推定することができる。

下市町の盆踊りの中に祭文踊りを紹介したが、この場合音頭取りが壇の上に立ち、手に破れた傘を持って歌い始めるのである。そして「ヨーイヨイ」とかけ声を立てると踊り手は円陣になって「ヤツケ^(注2)レ」というのはやしから始まるのである。この傘を持って唄うという風習は和歌山県など各地でも見られるが、この風習と関係のあると思えるのは『人倫訓蒙図彙』(1690)である。その中に法師が柄の長い傘をひらいて祭文をうたう風景が描かれており、その形態が似ている点注目に値する。つまり祭文のうたう姿が『人倫訓蒙図彙』によるところの法師であって、その姿をまねたものと思われる。つまり当時の祭文をうたう法師の姿以後に成立するということになる。

また歌祭文について『聲曲類纂』(1847)の中に次のように記されている。歌祭文は「山伏の態なり、小唄を取交へて作り、後又三味線にさし合せてうたひける也、今世祭文と號〔注：す 脱か〕るは、中古説経浄瑠璃を説せしものの、一変せしものといへり」また「江戸祭文・大阪祭文・生玉祭文などとして、其類葉多しといへり」などと記されており、山伏が広めたようにも伺い知れる。また様々な種類の祭文があったのであろう。これらの記録から、それ以後に祭文が盆踊りとして使用されるようになったと考えるのである。ということは、江戸時代後半期に祭文が各村々に普及したと推定するのである。祭文の文句は村人が作ったのではなく、おそらく手本をまねたものだと思う。そうすれば江戸時代後半期ということになる。

今日見られるような櫓の上の音頭取りを中

心とした盆踊りは案外江戸後期に流行した形かもしれない気がする。

しかし、今日見られる盆踊りの形態がそのころ成立したとしても、その起りはもっと古くから行なわれていたと考えられる。『大和国高取領風俗問状答』(1817)の中に盆踊りとして次のような記事がある。「奈良にて所望踊といふは、十人、廿人も手を仕組、衣装も色々風流にこしらえ、太鼓、三味線を入れ、所望の家にて踊る。家により座敷にて踊る。」とある。また「通例の踊は浴衣踊といふ。人ごとに浴衣を着し、三四尺たけの手ぬぐひをかぶりおどる。音頭計にて、是に三味線、太鼓も入れ申さず候」とある。後者のものは今日各地で行なわれている盆踊りのスタイルに近いように見うけられる。前者の所望踊りの例は古風な感じである。つまり、次の例などとしてらしあわせて見ればそのことがわかれると思うが、また盆踊りの源流が少し解つてくると考えるのである。

奈良県下の平城村、富雄村(共に現在奈良市)や生駒地方ではかつてハツボン(アラタナ)の家へ、村人が訪れて盆踊りをするという風習があった。アラタナとは、新しく亡くなった人の初盆に祭壇を作りまつる棚のことを言い、多くの場合アラタナは縁の軒下や座敷の仏壇の外へ作られる。そういうアラタナの家の庭で盆踊りをしたというのである。先の所望踊りも、アラタナのまつる家で所望されて踊るという形態ではなかったのではなかろうか。そうして見てくると、奈良市大安寺や佐紀などの念仏講の人々が、太鼓や鉦を持ってハツボンの家にゆき、アラタナの前にて念仏を唱するという風習も盆踊りと同一線上に考えてよいように思われる。また室生村などでもアラタナに村人があつまり、踊りはせぬがにぎやかになるというがこれなども本来踊りもなされていた様に思う。このようにハツボンの家のアラタナの前で踊ったり、念仏を唱したりする風習が盆踊りの根元的な姿であったと思われる。

注(1)~(2)『奈良県風俗誌(下市村)』

旧岩本家住宅について

長谷川 晋平

はじめに

大和民俗公園の民家集落は県下各地域から、代表的な民家や地域的特質をもった民家の移築をはかっている。

この民家集落は県内を四ブロックに分け、旧町場や旧街道筋に所在したものは町家集落に、奈良盆地内の一般農家は国中集落へ、東山間や宇陀郡地方のものは宇陀・東山集落に、吉野郡地方の山家・農家は吉野集落へと移築復原をおこなっている。

現在までの間に完成し、一般公開している民家は、町家集落の重文旧臼井家住宅および内蔵の二棟・県文旧鹿沼家住宅、国中集落の県文旧吉川家住宅・県文旧萩原家住宅・旧赤土家離座敷があり、また県文旧木村家住宅と旧前坊家住宅の2件の復原が待たれている。さらに宇陀・東山集落へは本年3月までに重文旧岩本家住宅を移築完成させ、4月から一般公開を始めている。この住宅で都合5件目となり、一步一步ではありますが、民家集落の完成を目ざしてすすめている。

本号では宇陀・東山集落の旧岩本家住宅についての概要を紹介する。

事業の経過

当住宅はもと宇陀郡室生村大字黒岩の岩本宗明氏の所有であったが、昭和54年3月に県が岩本氏から寄贈を受けた。さらに同年5月には重要文化財の指定を受け、翌月から国庫補助事業として解体移築に着手し、昭和56年3月までの22ヶ月を要して、住宅の移築復原とそのほか、屋敷地の修景や総合防災施設工事などもおこなった。なお、これらにあてた事業費は総額6,900万円余りである。

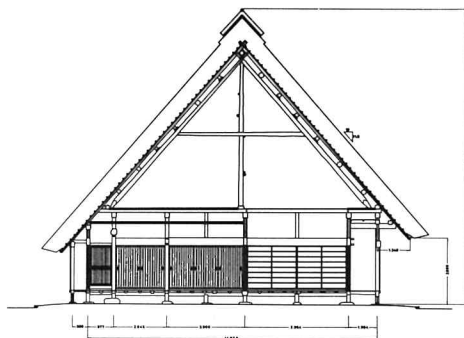
建物は一旦すべて解体して、大和民俗公園に運搬した。この解体中で建物の各部材の綿密な調査をおこなった結果、建設された当初の屋根形と居室や土間側の柱間装置などが明らかとなったので、組立は当初の形式に復原した。



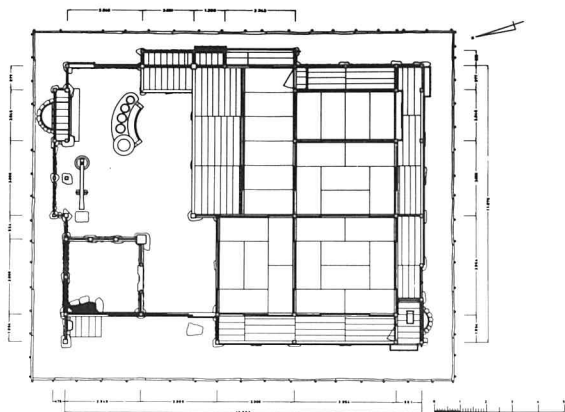
▲ 第1図 移築後正側面



▲ 第2図 移築後土間



▲ 第3図 移築後梁間断面図



▲ 第4図 移築後平面図

建物の概要

建築年代は明らかなでないが、建物の構造および形式などの手法上からみて、19世紀前半と認められている。

建物は西向きで桁行7間（間口13.893m）、梁間5間半（奥行11.070m）、の規模の入母屋造で茅ふきおろしである。

平面は桁行7間のうち、北方3間が土間で北西隅にはマヤが配されている。

床上部は桁行を二分して、上手には八畳、六畳、四畳の三室が前後に並び、下手は表側に六畳室があり、奥側は半間土間へ張り出して長六畳二室が左右に並び、床上部の西面と南面の二方には、半間幅の縁がめぐり、この西南隅に上便所が設けられている。

上手奥の四畳室の東面の2間幅は仏壇として先祖を祀る場所である。また南面には付書院が設けられている。さらに食器や小物などを収納する戸棚は、長六畳二室の東面と西面の東端間、流し台うえの4カ所にそれぞれ設けられる。カマドは土間後の中央に造られ、流し台はその北側に造付けられている。カラスも旧位置で据付けている。なお流し台の下や上便所、マヤ外側の北端の小便所下部などに、それぞれ木桶が埋め込んである。

県東部山間の風呂の位置は、古くはだいたいのマヤの裏側に設けている。当住宅もその位置であったようである。

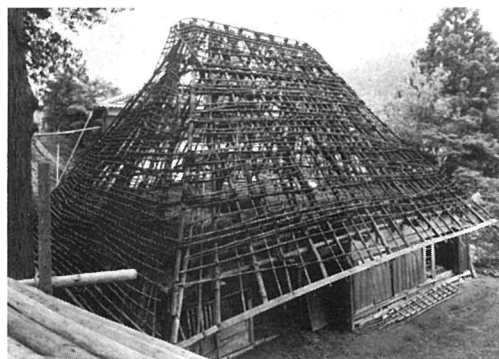
天井は上手の三室と隣の長六畳室が竿縁天井、下手の表側の六畳室は大引天井、土間側の長六畳と土間は簀子天井を張っている。また竿縁天井の上部にも一連の簀子天井を張っている。マヤは大引天井としてツシ2階に利用している。

床上部は柱間をすべて丈の高い差物で組み固められており、間仕切の食い違う所には柱を立てずに、差物の横面へ差物を差し鼻栓止めとするほか、柱や梁などの組み合わせ箇所はすべて通し柄で組んでいる。

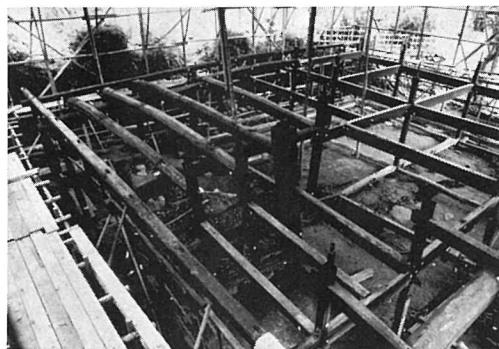
小屋組は桁行方向の間仕切の柱筋に敷桁を通し、柱の立たない土間後半部では、大きな梁を半間ごとに架け渡して、束立ちで敷桁を受け、この敷桁上は半間ごとに小屋梁を架けて真束併用の叉首を組む。正面側はせがい造としている。



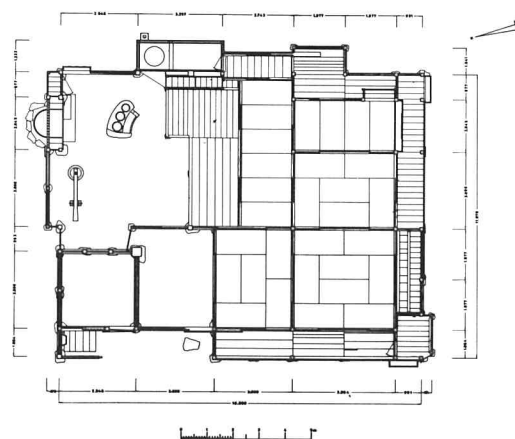
▲ 第5図 移築前正面



▲ 第6図 屋根解体中



▲ 第7図 軸部解体中



▲ 第8図 移築前平面図

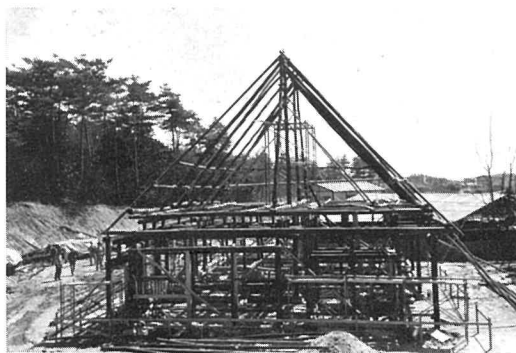
この住宅は建築年代は新しいが、梁組や差物などの構造手法にみるべきものがある。

平面は三間取に座敷三室を加えたもので、食い違い型の発展形式と考えられるほか、間仕切はすべて開放として、建物の外側で雨戸を入れ戸締りを施すなどが新しい反面、小屋組は16世紀にさかのぼる重文堀家住宅（吉野郡西吉野村）の真東併用と同じであって、古様も合せ新旧が混り合っている建物でもある。

黒岩地区の概要

当住宅があった黒岩地区は、室生寺の東南方へ約5kmへだたり、室生川の上流である胎ノ川の支流黒岩川の中程に南斜面を利用した戸数35戸余りの散村集落である。

この黒岩は、中世では田口庄に含まれ、興福寺北円堂領となっていたが、中世末期頃から武家の領地支配となる。近世に入って田口村として包括され、その後、宝永6年(1709)から上・下田口村と分村し、さらに享保6年(1721)上田口村より角川・黒岩村が枝村し



▲第9図 組立中



▲第10図 屋根ふき中

た。この黒岩村が現在の大字黒岩である。

また、この黒岩地内には古来より畿内の中心部と伊勢・東海地方との重要交通路として伊勢街道が通っていた。

この街道は中世頃より伊勢参り、室生寺参詣などの人々が多く往来した道でもあった。そうした名残りをのこす屋号は黒岩内では、当岩本家の「新屋」と黒本家の「カジヤ」の2軒と伝えられている。

岩本家について

さて岩本家は黒岩集落の西端に近く、代々この地で農林業を営み、幕末頃に庄屋・年寄を勤めたと伝えている。

当家の沿革については、現存する資料の嘉永6年(1853)「黒岩村切支丹宗門御副案人別寺請帳」と明治30年「岩本家代々戸籍簿」および位牌などによって知られる。

これらによると、当家の初代は現当主から7代前の惣右衛門さんで、二代友七さんと三代惣兵衛さんが庄屋・年寄を勤めたことが記されている。

また「黒岩村切支丹宗門御副案人別寺請帳」によると、黒岩村35戸のうち岩本家のみが、本寺の本善寺（吉野郡吉野町飯貝）と末寺の黒岩の明圓寺に男女分かれての檀那となっている。このことは全国的にその報告は少なく、檀家制や家長相続を知るうえで貴重な資料と思われる。

屋敷は旧伊勢街道の南添いにあって、移築した住宅は敷地中央に西向きで建てられ、この裏は石垣を積み一段高くなり、ここに居宅が新築されていた。付属屋として茶小屋が旧住宅前で屋敷入口の右側に懸造りで建てられている。

このほか居宅が新築される以前には、北から土蔵・稲小屋・柴小屋の三棟が建てられていたが、居宅の新築に伴って取壊された。

おわりにあたって、当住宅の移築復原および総合防災施設の完備は旧所有者岩本宗明氏ならびに関係各方面の方々の絶大なる、ご支援とご協力があったことを附記します。

野神まつりの絵馬

奥野義雄

野神まつりは農耕儀礼、とりわけ予祝儀礼として大和の農村にのこっている。

この大和の野神まつりは、その特色から3つの地域に分けられているが、ここでは紙面の都合で、絵馬を奉納する北部（北和）の野神まつりの調査の一部を報告するにとどめた。

大和の野神まつりは、ほぼ毎年5月初旬に行なわれるのが通例であるが、5月1日から6月1日または5月5日から6月5日に儀礼を営むところもある。

ここで報告する奈良市法蓮東垣内町の野神まつりは、5月1日の早朝に地元の農家の人たちによってとり行なわれる（かつては6月1日であったが、麦作の関係で1ヶ月早くしたという）。その年のトウヤ（当屋）を先頭に、不退寺の門前の路端にある野神（立木）に向う。今年のトウヤの家の者が、野神まつりの前日に「馬」と「牛」を描いた絵馬をつくり、これを当日野神に奉納するのである。この奉納する絵馬はベニヤ板（3%）に筆で馬や牛の姿を書いたもので、横18cm×縦12.5cmのものであり、頭は山形にしたものである。地元の畑内宗夫さんの話によると、かつてはトウヤによって色付けの凝った絵馬を奉納していたが、近年ほとんど簡略化したものとなっているということである。

野神まつりの当日、トウヤによって作られた絵馬は、直径2.5cm×長さ63cm程の青竹に取りつけられて、向って左側には「牛」の絵の絵馬を、右側には「馬」の絵の絵馬をさし、その前方には青竹に結んだ御幣を立てるのである。かつてはその年のトウヤがカヤの葉に巻いたチマキを供えたが、今日ではこの供え物はなくなったということである。

この東垣内の野神まつりは、この地域と隣接する佐保田の野神まつりと同様に簡略化されてきているようである。この現象は、今日農地と専業農家の減少によるものであるということらしい（畑内さんによる）。このような現象は、畑内さんのいう理由とともに、かつての農耕が自然現象のみに左右され、そして多くの労働力を必要としていた農業事情と異なり、所謂「科学的」に農耕を営みえるという現代人の自惚が、「神」を信じない情念を創り出したという要因もあるのではないかと、畑内さんとの話し（聞き取り）で感じとれた。

この東垣内の野神まつりで絵馬奉納が、いつ頃から現われたのかは明らかにしえなかったが、奈良県北部（北和）にのこる野神まつりの絵馬の伝承や資料の

調査を、とりわけ今回の特別テーマ展の祈願小絵馬の展示資料の調査の一環として行なっていく途に、一地域だけでも出現時期を明らかにしなければと思っている。この東垣内のほか、順次佐保田の野神まつりの絵馬の報告、田原本町鍵・今里の野神まつりの絵馬とミニチュア農具や奈良市三条町の野神まつりの絵馬（出馬と人馬の2種類）の調査を行なって報告していきたいと考えている。

ここでは、特別テーマ展の資料調査の内、絵馬奉納を伴う野神まつり、とくに奈良市法蓮東垣内の報告にとどめ、同地域に隣接する法蓮佐保田については内容的にも同地区と類似する（ただ、佐保田では、牛と馬の絵馬2種類が2枚づつ奉納されるところが異なる）ので割愛したことをこの文末で断わっておきたい。

(1981・5・11)



▲ 奈良市法蓮東垣内の野神まつりと絵馬

藍染め

大宮守人

昭和56年度事業として、県内に残る染織関係の伝承技術をカラースライドで収録する事については先に紹介した（だよりⅧNo.1）が、ひと通り収録できた藍染めの工程の中で見つけた事をここでは紹介してみる。

なお、これは、新発見という意味ではなく、生活の古典（伝承文化）としての藍染め技術を目前に見た新鮮な感想であり、筆者なりの再発見である。

藍染めを業とする家を紺屋（こゑや）というが、いま奈良県内では、井上富夫さん（宇陀郡室生村下笠

間）が唯一の紺屋になってしまった。

井上さんは、3年前になくなった一治さんのあと継ぎ、4代目の紺屋として18コの藍甕を守っておられる。

A 原料 天然の植物染料である藍は、昔から阿波（徳島県）で産したが、井上紺屋へは大阪の間屋で染（発酵させた藍の葉）を藍玉（練った玉状のもの）に仕立てたものが送られて来た。今日では染として徳島から直接買うため、藍玉を作るのと同じ練りの作業が紺屋の仕事として一工程ふえている。

井上紺屋ではあたらしい藍をたてる(アイダシ)時、藍甕の中へ薬を4貫目(15kg)を入れて熱湯をかけ、さめた頃に素足で甕の中に入って両足で練る。昔は、問屋が臼と杵で練り藍玉として供給したが、需要の激減によって問屋が消滅し、紺屋の仕事が一つ増える事となった。

B 藍の花 これは観賞する花ではなく、藍甕の液面に生ずる泡で、藍の発酵によるものである。

紺屋は、泡の色、硬さ、液の味(指でなめる)によって藍の状態を知り、小麦粉(昔はフスマ)や砂糖、酒なども注いで発酵に活力を与える。また藍は低温に弱く、保温(凍てさせないよう)にも気を配る。

藍をあらたに仕込む(アイダシ)時も、隣接した甕から桶に三杯ずつとり攪拌してはもどす事を数回行うが、これは、発酵菌をあたらしい藍に移植のために行われる。

あたらしい藍の花は濃い赤紫色で、使いこむにつれ青紫に変わるが、液面に盛り上って浮く泡の色は梅雨時の紫陽花のようで美しく、花と呼ばれるのもうなづける。

井上紺屋の発酵菌は、4代、100年のあいだ、絶え間なく手入れされて今日に至ったものである。同じ材料で手順どおりにしてもうまく行かないのは、発酵菌がないためだということである。

C 酸化発色 濃紺色の液面をかきわけると下は薄紅色の液が底まで溜っているのがわかる。藍は空気に触れて紺に染まるので、染めの工程では液につけて絞るたびに、①シャクル、②テダマラツク、③サワク、④床に落してサワク、などの動作をして、糸にむらなく空気があたるように気配りされている。

以上が収録調査の概要であるが、こうした伝承技術は人々の経験の蓄積であり思考の足跡である。知識としてすぐに使いこなせるものではないが、無形の文化遺産として大切にしたいものである。



▲ 井上富夫さんと作業場

★★★★ お知らせ ★★★★★

民俗博物館の行事予定

☆特別テーマ展「日本人の祈り—小絵馬—」

期間▷⁵⁶10月8日(木)~11月29日(日)

列句解説と特別講演 10月18日午後1時から

☆体験学習講座(募集制)

テーマ▷「フゴづくり」

日時▷10月25日 午後1時から(1回実施)

※往復ハガキにて申込み制度になっております。
なお、御希望の方は往復ハガキにて申込んで下さい。

テーマ▷「ゾウリ・シメナワづくり」

日時▷12月19日~20日 午前10時30分から

※学習内容の詳細は応募の折に問い合わせ下さい。

☆第2回民俗学カルチャーサロン

民俗コース〔講義〕実施中(募集制)です。

実習コース・募集制

テーマ・日時▷「フゴづくり」10月25日・午後1時~、「ゾウリ・シメナワづくり」12月19日~20日・午前10時30分~
民家コース〔講義〕は⁵⁷2月28日から隔週

日曜(3回)実施します(募集制)。

☆お詫び(訂正)

通巻27号の館だより表紙写真が左右逆転して掲載しましたことを、ここに訂正いたします。

【表紙解説】 7月23日、川西町結崎では、村の有志の老女が組織する「尼講」の講員たちで、村の堂舎に祀られている地藏石仏の前で御詠歌や和講を唱えて、地藏まつりを営むのである。奈良県下の大半の地藏まつり(盆)は、8月23日に行なわれるようであるが、旧奈良市内周辺や川西町域では古くから7月23日に地藏尊を祀るということである。

■編集後記■

昨年、涼しい夏から一転し、熱帯夜の続いた今夏にも台風の関係で二・三日涼しい夏の日をみた。だが、これもちかのまの「真夏の夜の夢」のごとく過ぎ、暑い夏が戻ってきた八月後半。空はもう秋の雲に覆われながらも、暑い陽は、九月の空にいたっている。

公園も民家も、そして博物館も新館長・次長のもとで活動して、早や半年を過ぎようと、わている。無事にやり過ぎた日々、活動・行動する論理が育まれてきているように思える。言葉の表現に先行する行動の表現が、また行動の表現に先行する言葉の表現が、相関して、新しいイメージの創造を求めるための一歩として一待ちうける秋。(☆)